



Data

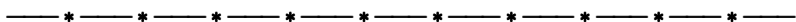
監督・原案・脚本：西川美和
 出演：松たか子／阿部サダヲ／田中麗奈／鈴木砂羽／安藤玉恵／江原由夏／木村多江／やべきょうすけ／大堀こういち／倉科カナ／伊勢谷友介／古館寛治／小林勝也／香川照之／笑福亭鶴瓶

👁️👁️ みどころ

火事によってお店を失った若夫婦が選んだ道は、結婚詐欺。そのプロデューサー役を松たか子が、その実行役を阿部サダヲが小気味よく演じている。

その鮮やかなテクニクには恐れいるが、転々と移動した『クヒオ大佐』（09年）に比べ、ふたりの夢は新しくお店を構えることだから、ちょっと調べられればすぐにアウト？そんな予想どおりの結末は西川美和監督オリジナル脚本の弱点だが、本作に見る人間模様は面白い。

不景気な世の中、不安定な人間関係の中でお結婚願望を持つ女性たちは、くれぐれもご用心を・・・。



■西川美和監督に注目！今回のオリジナル脚本は？■

『ゆれる』（06年）は本作と同じように西川美和が監督・脚本・原案をした最高に面白い2人兄弟の人間ドラマだった（『シネマルーム14』88頁参照）が、本作は男と女の人間ドラマ。したがって、まずはそんな西川美和監督と今度のオリジナル脚本に注目！

映画冒頭、東京の片隅にある小料理屋「いちざわ」を経営する料理人の夫・市澤貫也（阿部サダヲ）と、店を切り盛りする愛想の良い妻・市澤里子（松たか子）の姿が映し出される。ところが、大勢の客で賑わっている中、突然調理場から火が。慌ててこれを消し止めようとした貫也が誤って天ぷら油をひっくり返したため、たちまち店は火の海に。最近私の事務所の近隣でも若い夫婦が2人で切り盛りする店が増えているが、10年以上頑張っていてやっと店を手に入れ、経営が軌道に乗ってきた時に火事によってすべてを失った2人が途方に暮れたのは当然だ。しかし、こんな時女は立ち直りが早い。ところが、貫也の方は容易に立ち直ることができず、缶ビール片手のパチンコ通いと妻がアルバイトを始めたラ

ーメン屋に立ち寄ってのイヤミ三昧。導入部はこんな設定だが、この後この2人はどんな方向に？さて今回の西川美和オリジナル脚本の冴えは？

■□■結婚詐欺とお店の再興は両立？そこに少し違和感が■□■

NHK大河ドラマ『平清盛』で阿部サダヲは当時最高の知識人＝僧侶であった信西役を演じていたが、どちらかというともあの丸っこい顔は、『舞妓Ha a a a n ! ! !』（07年）『シネマルーム13』（179頁参照）のようなコミカルな役のほうがよく似合う！また『クヒオ大佐』（09年）で堺雅人が演じた天才詐欺師は、天性の詐欺師だった（『シネマルーム23』（202頁参照）が、本作で阿部サダヲが演ずる結婚詐欺師ぶりをみると、これも天性で騙しているだけに、クヒオ大佐に勝るとも劣らない。



『夢売るふたり』9月8日（土）大阪ステーションシティシネマほか全国ロードショー

他方、失意の中でもしっかり睦島玲子（鈴木砂羽）と一夜の浮気を実行したうえ、彼女が不倫相手の外ノ池俊作（香川照之）から手切れ金として貰った100万円を彼女から貰い、これを嬉々として自分に手渡してくる貫也の姿を見て、貫也の新たな可能性＝能力を見出したのが里子。『告白』（10年）（『シネマルーム25』（51頁参照）で心の奥底に潜む女の恐さを見事に表現した松たか子が、本作でも結婚詐欺師の名プロデューサー役としての恐さを見せつけてくれる。新たに2人でお店を再興するために里子が思いついたのは、結婚詐欺。貫也は一方では真面目な板前でありながら、他方では子供のように女に甘えることによってその信頼を獲得し自然にお金を引っ張ることができる能力を持っているのだ

から、これを活用しない手はない。そんな決心をした里子の最初のターゲットは、両親と同居したまま未婚であることを同席した妹の佐伯綾芽（倉科カナ）から嫌味っぽく責め立てられる棚橋咲月（田中麗奈）。さてここで貫也がみせる結婚詐欺のテクニックとは？

まずはこの鮮やかなお手並みに感服させられることまちがいないのだが、お金を受け取った途端に勤めていた料理店をドロシたのでは、いつか2人でお店を再興しても被害届が出てたちまち捕まってしまうのでは？『クヒオ大佐』はあちこちを移動して詐欺を働いていたから長く生き延びたが、結婚詐欺で貯めたお金で立派な料理屋を構えるというのは少し無理があるのでは？弁護士の私にはそんな問題点が見えてくるため、西川美和監督のオリジナル脚本で本作の基本軸とした、結婚詐欺による料理屋の再興というストーリーには少し違和感が・・・。

■多様なターゲットたちは、なぜカネを？■

本作は137分と少し長尺になったが、それは中盤における里子と貫也の結婚詐欺のターゲットが①結婚したい独身OL・咲月に続いて、②男運の悪い風俗嬢・太田紀代（安藤玉恵）③孤独なウエイトリフティング選手・皆川ひとみ（江原由夏）④幼い息子を抱えたシングルマザー・木下滝子（木村多江）と次々登場してくるため。その結婚詐欺ぶりが本作中盤の見どころだから、貫也とこれらのターゲットとの「絡み」をじっくり楽しんでもらいたいが、興味深いのはこれらの女たちがそれぞれ何らかの悩みや悲しみを抱えていること。

女の里子にはそれがすぐにわかるらしい。そして、その悩みや悲しみがわかりさえすれば、その弱みにつけ込んで貫也の優しさ売り込み金を吐き出させることなど、里子にはへのカッパらしい。その結果、風俗嬢の紀代はなげなしの貯金をすべて提供するわ、足のケガでオリンピックへの夢を断たれたひとみは、手術代として300万円を提供するわ、すべて里子の計算どおり……。自分たちは兄妹と偽ってお芝居をしたり、妹のガンの手術代が必要とエグイ嘘をついてみたり、里子のシナリオは自由自在だが、それを演じる貫也の方はさすがにそれが続くといライラ。新しいお店のために。それが2人の共通の目標だったし、今はその目標どおりの立派なお店の開店準備が着々と進んでいるものの、次第に夫婦の気持のズレ違いは大きなものに……。

■板前の命「包丁」が思わぬ事件を・・・■

本作のラストの女として登場する滝子はハローワークの窓口で貫也・里子夫婦に新しい仕事を斡旋してくれた女性だが、その幼い一人息子が貫也に懐くとともに、里子との間で夫婦の語らいを失った貫也も滝子の中に懐かしい家族の味を感じ始めたらしい。今日もいそいそと容器におかずを詰め込んで滝子の家に向かい、お店の方は里子に任せきりにしている貫也の姿に里子はおかんむりだが、板前の命である包丁を持ち込んで滝子の家の台所で料理をつくっている貫也にその後こんな「大事件」が訪れようとは……。

そのきっかけは、貫也の最初の結婚詐欺の犠牲となった咲月が依頼した私立探偵・堂島

哲治（笑福亭鶴瓶）の登場。『母べえ』（07年）（『シネマルーム18』236頁参照）や『ディア・ドクター』（09年）等で演技者としての存在感を見せつけた鶴瓶が本作でも独特のキャラクターでその持ち味を發揮している。「大事件」とは、貫也の姿を見て殴りかかった咲月に対して「もういい加減にしとき。手を出したらアカン言うたやろ」と止めに入った堂島の背中を、滝子の幼い息子が包丁でグサリと刺したこと。なぜ貫也の包丁が子供の手には・・・？

その顛末はあなた自身の目で確認してもらいたいが、結婚詐欺を続けてお金を貯め、その金で立派なお店を構えるという里子の構想はここでたちまち挫折することに。血にまみれた包丁を持った貫也の姿は近所の人たちに目撃されているから、今や貫也は立派な「塀の中」の人に。そうなると、開店準備が進んでいたあのお店の契約も当然パー。西川美和監督のオリジナル脚本はラストにかけてそんな大波乱を持ち込んで2人の結婚詐欺のバカバカしさを描いていくが、さてこの男と女のなれの果ては・・・？

2012（平成24）年7月14日記

司法試験「予備試験組」に注目！

1) 「身近で利用しやすい司法の実現」を目指す司法制度改革の一環として、2004年に法科大学院が発足した。その時の司法試験合格者の見込みは7～8割。これは合格者を2010年ごろに3000名とすることを前提としたものだ。ところが、法科大学院は74校も乱立し、定員も約5800名にも上ったが、合格者は1000～1500～2000名までしか増えなかったため、合格率は年々低下し、近時は30～25%程度。そんな中、2011年に始まった「司法試験予備試験」に注目！

2) これは経済的事情などで法科大学院に通えない人にも公平に司法試験の受験機会を確保するための制度で、誰でも何回でも受験できるのがミソ。そして短答・論文・口述の各試験に合格すれば、法科大学院修了者と同等の知識・応用力を持つものと判定され、以降5年間で

3回まで司法試験を受験できる。

3) 2012年の司法試験にはこの予備試験組の第1陣が85名受験し、58名が合格したから、合格率は68%。その半分近くを現役大学生が占めた。これによって、予備試験の合格率は1.8%という狭き門だが、優秀な現役の法学部生ならわざわざ高い授業料を払って2年間も法科大学院に行かなくても、自力でしっかり勉強すれば司法試験に合格できることが明らかになった。

3) 大学3年生まで学生運動に明け暮れていた私は21歳の誕生日から独学で司法試験の勉強を開始し、1年半の勉強で合格できた。その原因は学生運動の中で、喋ることと書くことを鍛えたおかげと確信している。要は主体的な勉強が必要なのだ。その視点から、私は予備試験組に大きく期待！

2012（平成24）年11月1日記